
午後五時、映画館前。

美咲 堇

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

午後五時、映画館前。

【Nコード】

N9073B

【作者名】

美咲 堇

【あらすじ】

夏休み、一人暮らしの資金難から映画館の売店でバイトをしていた主人公。それなりに仕事をこなしていた彼は、映画館は経営難から閉鎖、という話が持ち上がっている事を耳にする。一方その頃、映画館に毎週決まった時間に訪れる少女がいた。しかしどうも誰かと約束して来ている様子はなく、近所でも見ない顔。不思議に思った主人公はその少女に声をかけるが……。

午後五時、映画館前。

午後五時、映画館前。

じりじりと照りつける太陽の下、バイト先の映画館まで自転車をこぐ。夏休みに入った僕の日課みたいなものだった。田舎の夏は、ほかと比べて暑いのだろうか。どちらにしろ暑さが苦手な僕にとって、夏なんてものはなくてよかった。

電車で行くような距離でもないけど、自転車ではすこし遠い。どうせお金を稼ぎに行くのだから、ここで消費するのはばからしい。けつきよく自転車に落ち着いたのだが、真夏の炎天下、二十分の距離はつらい。

まだ家をでて五分。そんなに疲れたわけでもないのに、つ、と額から汗が流れてくる。駅前の映画館までは、まだ遠い。それにしても、

「暑い……」

とちゅう高校の友人だとかに会って手を振ったり、すこしとまって話をしたりしながら、いつも通り映画館についた。

キツ、と油の足りないブレーキ音をたてて、自転車をとめる。

この映画館で、僕が足しげくバイトを続けているのには理由があった。

僕がこの映画館でのバイトをはじめたのは、夏休みに入るすこし前のことだった。家から近いわけでもないけど、ここはほかのバイト先候補よりもすこし賃金が高かったのだ。

夏休み前、一週間くらいから働きはじめて、三週ほどすぎたあたりで僕はあることに気付いた。

毎週木曜日、夕方五時ごろ。ちょうど映画館がしまつて僕が帰る時間になると、入り口のところにあるポスターを眺めている少女がかならずいる。声をかけようとは思ったけど、いきなり声をかけたら変な人だと思われそうだし、それもあまりいい気持ちのすること

午後五時、映画館前。

ではないのでやめておいた。

それは夏休みが終わりに近付いたこのごろも続いていて、相変わらず昨日も少女は来ていた。

別にだれかと待ち合わせているようすもなく、映画を見になかへ入るわけでもなく、ただ少女はたまに張り替えられるポスターを見上げてそこに立っていて、気付けばいなくなっていた。しかも映画を見にきた友人にその容姿を説明しても、近所に住んでいるわけではないらしくだれでもなかった。

僕はいつの間にか、その少女のことを気にかけてながらここへ来るようになっていた。

田舎のこんな映画館、やってくるのは小学生とか、それ以下の子供を連れた親子がすこしずつ。

僕はそんな人たちをぼおつと眺めながら、チケットを売ったり、ポップコーンを売ったりしている。人が来なくなるとほうきとちりとりを持って入り口を掃除して、近所の人たちとお話したり。とはいっても、暇なおじいちゃん、おばあちゃんくらいしかないんだけど、ここでバイトするうちに近所の人とはそれなりに仲良くなった。僕もこの辺じゃちよつとした力才だ。

そんなことをしているうちに、少しずつ日が傾いてもう四時半を過ぎていた。そろそろ片付けをして帰らなくては。

映画も最後の回が終わって、それを見ていた数人の客が中から出てくる。小さい子供たちも何度か来るうちに僕の顔を覚えたようで、僕に手を振って帰っていく。僕も手を振り返してそれを送る。

チケットの半券を片付けて、ポップコーンの機械を洗って、売上を数えてここの館長に持っていく。館長は六十歳すぎくらいのおじいさんだ。あの人はいつも映写室にいて出てこない。映画が好きらしい。フィルムの古臭い臭いが好きだとも言っていた。僕にはよく理解できないけれど。

「かーんちよう、もう五時なりますよ」

午後五時、映画館前。

声をかけられておじいさんははじめて気付いたらしい。でも慌てたりせず、緩慢な動作で立ち上がる。

「あや、もうそんな時間さなったべな」

「うん。これ、今日の分」

と僕は売上を館長に手渡した。

「ありがとうございます。あとはわしがやっつくがら、もう帰ったっていいよ、准くん」

「分かった、それじゃあね、館長。また明日来るよ」

館長は訛って「へばな」と言った。

下へ戻って、入り口のシャッターを閉めて裏へ回り、自転車に乗って表までやってくる。

「あ……」

いつもの白いブラウスに淡い青の膝までのスカート姿。まるで昭和の僕は昭和の人間じゃないけれど。そう、またあの少女だった。

僕は自転車を手で押して、その少女に近付いた。夕方とはいえ、まだ暑い。背中を汗が伝うのが分かる。少女はやはりポスターを見上げていた。

「ねえ、映画……好きなの？」

僕は少女に、思い切って声をかけた。

はじめ、少女は自分が話しかけられたことに気付いていないようで、すこし間をおいてこちらを振り向いた。

「……わたし？」

「うん。いつもここで見てるから」

少女の声は透き通っていて、ガラス製の風鈴のような音がした。

少女はまたポスターをしばし見上げて、すこしの後に首を左右に微かに振った。

「ううん、なんでもないの」

そういうと少女は、映画館の脇の小さな道に入って行ってしまふ。自転車を押して僕はおいかけたけど、僕がそこを垣間見たときには

もう少女の姿はなかった。

一度首を傾げて、僕は自転車にまたがった。

* * *

次の日、僕がバイトに行くと、館長がいつもの緩慢な様子で、そして訛った言葉で僕に告げた。

「今月一杯でなあ、この映画館はおしめえだ」

つまり、閉鎖するということ。それは仕方のないことだったのかもしれない。こんな田舎だし、客なんてほとんど来ないし、きつと赤字続きだったんじゃないだろうか。やっぱり仕方ないんだと僕は思った。

僕はそうですか、とだけ言った。また新しいバイトでも探そうかと。でも館長はすごく寂しそうな顔をして、いつもの映写室に入っ
て行った。

やっぱり今日もお客はほとんどなくて、それでも館長はフィルムを回し続けていた。

あんまり暇すぎた僕は、ポップコーンをつまみながらのチケット整理にも飽きて、外の掃除に取り掛かった。日向ぼっこをするお婆さんや、犬の散歩にきたお姉さんと話をしながら。

また五時になった。受付でテレビを見ていた僕は、時計を見てそのことに気付き、外へ出てみた。

少女がいた。淡い青のスカートと、白いブラウス。どうしていつも同じ格好をしているのだろう。

「ねえ」

少女が振り向いた。

「君はどこに住んでいるの？」

午後五時、映画館前。

彼女は頭を振った。

「何ていう名前なの？」

「一人で来てるの？」

「どうしていつも五時にいるの？」

「映画は見ないの？」

どの質問にも、答えは同じだった。

「この映画館、今月でやめるんだって。閉鎖しちゃうんだ」

僕のこの言葉だけには、少女は驚いたように目を見開いた。

「こんな田舎だし、仕方ないかなって思うんだけど」

そう言っただけは、映画館を見上げた。壁ははがれかけて、看板の文字も薄くなっている。ポスターを飾るショーウィンドウも、ところどころひびが入っていて、ガムテープで止められている。

「おい准、なにサボってんだよ」

後ろから声がかかる。高校の友人だった。

「サボってなんかないよ」

「じゃあ何なんだよ。しかも独り言なんかぶつぶつ言いやがって…」

…気味わりいぞ」

「独り言なんかじゃ」

そういいながら隣を見ると、少女の姿はどこにもなかった。

「違うよ、さつきまで女の子と話してたんだ」

「はあ？ おれ、お前のこと見つけて自転車こいできたけどよ、ずっと一人だっただろうが。見得張ってもばればれだぞ？」

嘘だ。

僕がぼおっとしていっていると、その友人はじゃあな、と言って行ってしまうた。

僕は独りなんかじゃなかった。確かにあの少女と話をしていたんだ。そのはずだ。

考えているうちに、だんだん自分の記憶が曖昧になっていく気がした。

今日の勘定をまだ館長に渡してなかったことを思い出して、慌て

て受付へ戻った。

映写室のドアをそっと開けると、館長は眠っていた。

「館長、今日のお勘定」

遠慮がちにそう言っていると、館長はすぐに起きて僕の方へ手を伸ばしてきた。

「館長、聞きたいことがあるんですけど」

「ん？ なんだべ」

僕は、毎日午後五時に映画館前にいる少女の話をした。青いスカート、白いブラウス。ガラスのように透き通った声。その少女と話したことを。

「知りませんかね、館長」

少しして、館長は大きく息を吐き出した。そしてなにやらポケットから、黄ばんだ紙切れを出してきた。

「こんな子でねがったが」

写真だ。僕はそれを館長の手から受け取ると、じっと見つめた。

そこには少女と少年が映っていた。少年は館長のような。少女は色は分からないがスカートにブラウス。二人とも、今の僕よりもっと幼いようだ。

「え？」

「やっぱりその子だったか」

「ぎい、と椅子を軋ませて館長は息をついた。」

「その子はな、ここで死んだ子だ」

「死んだ？」

「おらと一緒によく遊んだ子でな、綺麗な子だった……だとも、心臓が弱くてな。映画見ながら死んでった」

僕の口は半開きのまま、塞がらなかった。僕が話していたあの少女は幽霊だというのか。

「そうか、准くんにも見えたっけが。んだがんだが。この映画館もおしめえだかんな、寂しかったんだべ。今度、墓参りにでも行くべ、

准くん」

僕は無意識に頷いた。

その次の日、僕と館長はその少女の墓参りにいった。汚くなった墓を綺麗にして、花とお菓子を備えた。

館長は長々と手を合わせて、拜んでいた。

ふと、墓地の入り口の方を見たのは偶然だった。けどそこからこちらへやってくるその人の姿は、嫌でも僕の目に映った。

「館長、館長」

思わず館長の肩をゆすった。僕の見ている方を館長も見た。

「ああ、あの子だったか、准くんが会ったのは」

館長は思わず笑ったようだ。そうかそうか、としきりに頷いた。

僕たちに気付いて会釈する少女。時代遅れの青いスカートに、白いブラウス。

「この子の双子の姉の、娘だ。そっくりでびっくりしたべ？」

今度こそ開いた口は塞がらなかった。

午後五時、映画館前。

「こんにちは」

午後五時、映画館前。

ガラス製の風鈴のような透き通った声でした。

(後書き)

季節外れの夏のエピソードです。
評価感想、ありましたらお願いします。今後の参考にします。

スペシャルサンクス：田夫野人さま

あらすじを頂きました。感謝申し上げます。

午後五時、映画館前。

午後五時、映画館前。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9073b/>

午後五時、映画館前。

2008年11月7日09時21分発行